

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K00764

研究課題名(和文) 子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究

研究課題名(英文) Study on How the Park as the Base of the Local Community Should be in Order to Link up Elderly People with Children

研究代表者

番場 美恵子 (BAMBA, mieko)

昭和女子大学・生活科学部・講師

研究者番号：40384630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地域に身近に点在する公園において、子どもと高齢者をつなぐ場として、地域コミュニティの拠点となる公園のあり方を模索することを目的としている。3地域の計9か所の公園において、行動観察調査およびアンケート調査を行った。
公園の利用実態、公園管理の方法および重要性、イベントをとおした地域コミュニティ活性化の可能性に関して、いくつかの知見を得た。

研究成果の概要(英文)：This study is about the local parks, located in local residential areas and used for community activities and consequently connect between elderlies and young children. We surveyed nine parks in three areas by monitoring the activities of people and the questionnaire surveys to them.
As a result of the survey, we found out some knowledges on how the parks are used, method of management, importance of those parks and how communities are activated by the events which utilizes the those parks.

研究分野：建築計画、住生活、住居学、居住様式

キーワード：街区公園 地域コミュニティ 高齢者 子ども 公園管理 利用形態 地域住民

1. 研究開始当初の背景

公園という公共空間は、緑に囲まれた自然環境の中にあり、すべての人に公平に開かれている。いつでも自由に入出りが可能で、多様な行動が保障される空間である。公共空間の中でこれほど魅力的かつ身近な屋外空間である一方で、あまりにも身近にありすぎて見落とされている存在ともいえる。実際に、多くの地域の公園では、人の気配、とくに子どもの遊ぶ姿を見かけることは少なくなり、有効に活用されているとは言い難い。現在進行中の少子高齢社会という人口構造の大きな変化を見据えて、公園は子どもだけでなく高齢者を含む幅広い年齢層が利用できる場として捉えることが肝要である。

現代の子どもはゲームなど室内遊びが多い、習い事や塾が忙しいなどの理由で、外遊びが少ない。外遊びは子どもにとって発達に必要な体力づくりの基礎となり、友だちとの協調性、社会生活の基礎を身に着ける最良の機会である。そして、公園は外遊びの最大の空間である。

一方、余暇時間を持て余す高齢者にとって、身近にある公園で顔なじみと談笑することで孤独感から解放される。また、公園に健康遊具があれば身体の健康にも効果があり楽しみになる。さらに、公園の管理を任せられると、例えば遊具の修理や花壇の手入れ等をして生き甲斐を感じることができる。公園に集まる子どもと高齢者を結ぶイベントを高齢者が中心になって開催すれば、みんなの思い出に残り、長じてお互いに地域に愛着が持てるようになる。公園とはそのような可能性を秘めた空間であると捉えることができる。

2. 研究の目的

地域に点在する公園は、オープンスペースとして貴重な環境資源であり、人々が集う地域コミュニティの拠点にもなる。少子高齢化が進み人口減少社会の現在、公園ストックを活用して、地域に依存する割合が高い子どもと高齢者をつなぐネットワークの形成は喫緊の課題である。本研究は、公園の空間形態と利用形態との相関関係を、子どもと高齢者の複合的な視点から把握し、地域コミュニティの拠点となるべき公園のネットワークの構築に何らかの知見を得ることが目的である。

本研究は、2011年から開始しており、科研費による研究調査前（2014年）までに、4年間3地域（東京都世田谷区、横浜市港北区、横浜市南区）で調査を行っている。それぞれの属性による利用形態の特徴や公園の使い分けなどについて、調査結果からまとめられる知見がいくつかあるが、対象地ごとに利用形態の特徴がみられることから、より多くの公園において同様の調査をし、データの蓄積を図ることが重要であると考え。今回報告する3年間の調査および結果については、おもに公園管理に関すること、高齢者に着目した利

用形態、地域コミュニティの拠点となるイベントでの活用についてまとめる。

3. 研究の方法

公園の利用形態および空間的特性を捉えるために、行動観察調査およびアンケート調査、ヒアリング調査を行う。行動観察調査からは、来園者の属性、利用形態の傾向を探り、アンケート調査およびヒアリング調査からは、来園者の公園利用状況の実態および公園に対する要望、地域コミュニティに対する参加の実態および希望を明らかにする。調査は、公園の種類としてもっとも規模が小さい街区公園を中心とし（一部近隣公園もあり）、1人間の徒歩圏行動可能範囲として直径1kmと設定し、その範囲内に規模の異なる公園が混在する地点を選定し、そのエリアにおける公園を対象とする。具体的には、小規模S（1,000㎡未満）、中規模M（1,000～5,000㎡）、大規模L（5,000㎡以上）の3つが含まれるエリアにおいて各規模1か所ずつをピックアップし調査を行う。1か所につき平日2日、休日1日、9時～17時までの利用者の状況について来園者全員の行動および時間を記録する。アンケート調査については、来園者に直接声がけし、アンケート回答を依頼、その際利用形態や要望について追加でヒアリングを行っている。

また、公園を管理する行政および公園管理の住民団体の代表に、公園に関するヒアリングを行っている。調査対象および調査数は以下のとおりである（表1）。

表1 調査対象公園一覧

所沢市H地域（2015年調査）				
規模	公園名	公園の種類	面積	開園年月
S公園	新郷北	街区公園	712㎡	1993年
M公園	新郷	街区公園	2,505㎡	1986年
L公園	東所沢	近隣公園	21,000㎡	1982年
アンケート調査数：155人				
川崎市宮前区K地域（2016年調査）				
規模	公園名	公園の種類	面積	開園年月
S公園	第2児童遊園地	街区公園	429㎡	1982年
M公園	向ヶ丘	街区公園	3,447㎡	1974年
L公園	土橋7丁目	街区公園	5,000㎡	1973年
アンケート調査数：175人				
栃木県小山市O地区（2017年調査）				
規模	公園名	公園の種類	面積	開園年月
S公園	西山南	街区公園	1,095㎡	1988年
M公園	青葉	街区公園	3,342㎡	1990年
L公園	西山	街区公園	6,665㎡	1989年
アンケート調査数：116人				

(1) 2015年調査：埼玉県所沢市H地域

中心市街地から東に約4kmのところを位置しており、以前は大半が畑および山林であった。昭和48年から土地区画整理事業が開始された。開発面積は約190haで、良好な住宅地となるように計画的に道路および近隣公園2か所、街区公園9か所が配置された。調査対象地はこの一角にある。宅地整備後も市街地農地が点在しており、そこを徐々に宅地化しているため、近年でも若いファミリー世帯の流入がみられる。

(2) 2016年調査：川崎市宮前区K地域

開園時期はいずれも40年以上前で、周辺の住宅および団地建設にともない作られた。MおよびS公園は、55棟からなる団地の中に位置する公園で、もともと団地の管理組合の所有であったが、市に移管されたものである。団地住民は高齢化が進み、子どもは比較的少なく、高齢化率が高い。

(3) 2017年調査：栃木県小山市O地区

小山市はJR東北本線、東北新幹線などが走り、東京圏まで60kmの立地にあることから、工業団地や住宅地が増加しているとともに、東京へ通勤しているサラリーマンも多い。小山市自体は中心地である小山駅がある小山地区と、工業団地や住宅が多い地区、農村地区の大きく3つに分類できる。今回対象としたO地区は、工業団地や住宅が多い地区で、調査した公園の周辺は30~40年ほど前に開発された住宅街である。開発当初は子どもが多くいたが、今は高齢化が進んでいる。

4. 研究成果

以下、調査地ごとに研究結果を示す。

(1) 埼玉県所沢市H地域 (2015年調査)

埼玉県所沢市は、東京のベッドタウンとして発展したまちのひとつである。高度経済成長期に次々と宅地開発が行われ、都心に通勤するサラリーマン世帯が増加したが、現在順次定年退職を迎え、地域で過ごす時間が増えている。それらが高齢者が地域でどのように過ごし、どのように公園を利用しているのかを調査し、世代を超えたコミュニティづくりの糸口を見出すことを目的とした。

アンケートから高齢者の利用状況を見ると、主に平日の午前中に週3~4回のペースで利用する人が多い。これまで公園で開催されるイベントに参加したことがある人は4割程度であるが、今後イベントがあれば参加したいという意思を持つ人は7割おり、また地域の人や他世代(子ども)と機会があれば関わってみたいと考える人も半数以上いることは注目される。ちなみに、子ども、幼児保護者においても、イベントへの参加意欲は高い。

今回は、高齢者を中心に公園の利用実態を探ることを目的に調査を行ったが、結果的には高齢者の利用が少なく、利用者および行政

へのヒアリングから、その要因として大きく2つのことが考えられる。

ひとつは公園管理の方法である。基本的には市が一括して管理しており、清掃に関しては公園管理事務所、シルバー人材センター、社協などに委託して行っている。1か所の公園に対して週1~4日程度清掃が入る。利用者アンケートでは「公園はきれいに整備されている」と言い評価は高い。しかし、行政が管理することで公園が地域住民の身近なものになっていないという一面もある。市は住民の手による管理(アダプトプログラム)事業も行っているが、件数は少なく認知度は低い。管理上の手間を考え、公園に花壇がないのも特徴といえよう。

もうひとつの要因として、「まちづくりセンター」の存在があげられる。所沢市の11の地区それぞれに設置されており、役所の出張所としての業務のほか、各種講座の開設や施設提供を実施する公民館業務、地域団体の支援を行うコミュニティ推進業務の3つを取り扱っている。そのうち公民館業務のなかで、高齢者を中心にサークル活動が活発に行われており(調査時で96団体)、年1回イベントとして文化祭も開催され、発表会やバザーを通して多くの地域の人たちとの交流がある。ここを利用している高齢者にヒアリングを行ったところ、複数のサークルに参加している人が多く、ここでの活動を通して交流や生きがいを見出しており、公園はほとんど利用しないという回答であった。センターの館長へのヒアリングでは、「当センターは世代を問わず地域の人々の交流を促すことを目的としているが、結果的に高齢者の利用が多い。元気な高齢者はまちづくりセンターを利用し、公園を利用する高齢者は少しタイプが異なるのではないか。」とのことであった。

上記のことが要因となり、公園の利用が少ないことが考えられるが、公園利用を活性化するためには、まちづくりセンターとの連携が肝要であると考えられる。実際、センターの存在によって既に地域交流の基盤ができており、高齢者をはじめどの世代にもイベントへの参加の意志がみられることから、活動場所をセンター内にとどめるのではなく、地域に広げることが望まれる。地域のオープンスペースである公園において、高齢者を中心にイベントを企画することにより、常時利用している子どもたちとの交流のきっかけになるのではないかと考えられる。また、地域住民で公園を管理することを行政が積極的に働きかけることも重要である。

(2) 神奈川県川崎市宮前区K地域 (2016年調査)

ここでは管理体制の異なる2つの公園の管理方法と利用形態を比較することにより、管理の違いによる公園の利用形態および問題点を考察する。

川崎市では各区に1か所ずつ公園管理と道

路管理を行う道路公園センターを設置している。また、住民の手による管理として、「公園緑地愛護会」と「管理運営協議会」という組織を制定している。宮前区の全公園 212 か所に対して、愛護会が 68 か所、協議会が 66 か所で（2015 年時点）全体の 2/3 の公園が住民の手による管理が行われている。逆に、残りの 1/3 の公園はこのような管理体制がなく、行政の定期的なパトロールや、組織ではない個人的なボランティア、管理センターへの苦情による対応によって管理が行われている。

道路公園センターの職員へのヒアリングによると、愛護会、講義会組織の多くは町内会が母体になっており、高齢化が懸念されている。また、住民の善意による組織なので、行政が強制的に結成を促すことはできず、数はほとんど増えていない。逆に、体力的な問題により、参加数は減少傾向にある。市としては、公園活動による積極的に介入できる協議会への移行を望んでいるが、協議会のほうが活動回数が多くなり負担が増えるので、あえて協議会には移行しないという愛護会も多い。

M 公園の管理形態は、G 団地の自治会のなかの公園部が中心となって管理運営協議会を組織している。春と夏に大規模なお祭りがこの公園で行われているが、自治会の各部署がそれぞれの役割を分担し、住民のみで運営されている。公園の利用形態については、1 人の平均利用人数は 99.6 人であった。午前中に高齢者の体操が行われており、1 回で平均 50 人が集まる。放課後の時間帯には小学生の子どもたちが遊びにやってくる。自治会のボランティアの高齢者が公園を見守り、時には虫取りを教えたり、子どもたちと高齢者が気軽に会話している光景が確認できた。

L 公園の管理形態は、住民の手による管理組織は入っておらず、基本的には行政の定期的な点検と数年に 1 度の樹木の剪定のみである。利用形態をみると、1 日の平均利用人数は 84.6 人であった。利用のピークは 10 時台で、平日はペットの散歩、休日は遊びにきた親子の利用が主である。樹木が多く、日陰に落ち葉がたまっていて、砂場はまったく使用されていなかった。ポイ捨てされたゴミも散乱していた。

アンケートでは、自由記述の中で、M 公園ではほとんどコメントがなかったのに対し、L 公園では「虫が多い」「ベンチが汚れている」「草が生え放題」「倉木の手入れが行き届いていない」「水がたまる」「砂利が多い」など、整備環境に関する不満が多い。

住民の手による管理がなされないと、危険を伴う状況以外の整備は見過ごされてしまう。公園が汚れるだけでなく、使われない場所が発生し有効に使われないなど、マイナスの要素が大きくなる可能性があるなどの実態が明らかになった。管理を住民に委ねることは、予算の削減、住民自身が愛着を持つことなど、地域の与点としての公園の使われ方

に一役買っているが、一方で、自治会の高齢化にともない、なり手がいないこと、活動に制限ができてしまうことなどの問題点が浮き彫りになった。

また、交流面として、「犬の散歩」がもたらす現象を把握した。犬の散歩者 53 名に対し、アンケートおよびヒアリング調査を実施した。犬の散歩における公園利用の頻度は、毎日が 74% を占め、習慣化されている。利用目的は、休憩が 38%、人との交流が 40% が多い。滞在時間は、15 分以内、30 分以内、1 時間以内の 3 つの山があり、1 時間を超える長時間も 15% 程度みられた。犬の散歩による公園マナーとして、「排泄物の始末」と「リード利用」がある。これに違反すると、非飼育者からの苦情が噴出するため、公園における飼育マナーは厳守されている。犬仲間の交流が抑止力につながっている。

犬の散歩に適する公園の条件は、犬が歩き回れる歩道や植樹エリアがあること、犬の散歩者が滞留できる広場があること、休憩できるベンチや犬に水を飲ませるために水飲み場があること、である。利用形態には、滞留型と通過型の公園に二分される。公園はあらゆる人たちの交流のためのプラットフォームであるといえる。犬の散歩を核にした緩やかな関係を結ぶ公園コミュニティの形成が確認できた。

(3) 栃木県小山市 0 地区（2017 年調査）

これまでの調査はすべて都市近郊を対象に行ってきたが、地方の公園を調査対象とすることにより、都市圏との相違および地方ならではの問題点を抽出する目的でこの場所を選定した。

小山市には、街区公園 82 か所をはじめとして、計 107 か所の公園がある（街区公園より規模の小さい幼児公園は除く）。市総面積に対する公園面積は、これまでの都市圏で調査を行った地域よりも小さいが、1 人あたりの公園面積は 10 倍程度大きい。また、都市公園を種類別にみると、都市圏と比べ街区公園の占める割合が若干少なく（77%）、かわって街区公園より 1 ランク規模の大きい近隣公園が 11%（12 か所）と多めであることが特徴である。また、小山市の街区公園では一般的に犬の散歩およびボール遊びが禁止されている。

また、公園の維持管理方法は、市の管理の他に、住民のボランティアによる「公園等愛護里親会」という組織が行っている。小山市は今後も宅地開発が続くことが想定され、それに伴って公園も増えていく。実際、毎年 10 か所弱の公園が新設されている。管理へのコストが膨らむこと、住民組織のボランティアのなり手が高齢化により減少していくことなど、管理への金銭および人手不足が問題点としてあげられる。

L 公園では、1 日の平均利用人数は平日が 30 人、休日が 93 人であった。属性別でみる

と、大人・高齢者は通過、休憩などが主で、利用時間5分未満が多い。小学生・乳幼児は、遊具やグラウンドを使つての遊びが主で、利用時間は15分～1時間未満が多い。調査時、休日の午前中はたまたま団体利用が重なったが、総じて公園利用者は少ない。とくに小学生や小学生の姿をみるのが少なかった。

M公園では、1日の平均利用人数が平日が53人、休日が29人であった。ここでも小学生・乳幼児の利用はほとんどみられなかった。

S公園では平日9人、休日22人の利用しかなかった。この公園はほとんど利用がなく、郵便配達や工事現場で働く人がトイレ利用するのが主な目的であった。

今回の調査では、全般的に公園の利用者が少なかったが、これまでの調査と比較して、とくに子どもの利用が少ないことがあげられる。小学生の保護者に対して行った追加アンケートによると、子どもが1週間に1回以上公園を利用すると回答したのは3割にとどまり、1か月に1回程度、ほとんど利用しないという回答も目立った。利用する公園は、街区公園よりも少し規模が大きく設備も充実している近隣公園と回答する割合の方が高く、アンケートからも街区公園の利用が少ないことがわかった。放課後過ごす場所としては、塾や習い事以外は家で過ごすという答えが圧倒的であった。一方、高齢者は特定の人たちであるが、自治会活動やグラウンドゴルフを通して公園の利用が一定数認められる。

公園の利用方法は、どちらかというより日常的に使われるというより、イベント的な利用の方が目立った。自治会長の話によると、自治会のイベントで公園を利用することも多いので、公園自体の存在は重要であると感じているようである。基本的に移動手段は車が主なので、歩いている人は少なく、とくに街区公園のような小さい公園はわざわざ利用することは少ない。一方で、公園自体のルールが厳しく、禁止事項が多いことが利用の少なさを増長させている。また、今後の公園の増加にともない、管理が行き届かなくなる問題も現実味を帯び、差し迫っている。一地方の公園の利用結果なので、地方の状況を一括することはできないが、都市圏より利用が少ない点、管理の財政不足、人手不足はより深刻であることが想像される。都市圏よりも活用の仕方に対する課題があることが指摘できる。

(4) 公園イベントの実施

これまでの調査、研究を踏まえ、公園において同世代の交流はあるものの、他世代の交流は少ないこと、公園でのイベントが地域交流のきっかけとなることが実態としてわかってきた。そこで、規模の小さい公園でのイベントをきっかけに、より顔の見えた交流や、顔見知りを増やすことができるのではないかと考え、当研究室と地域の高齢者を中心に、

公園でのイベントを企画した。地域の高齢者が、地域の子どもたちといっしょにつくる、あそぶ、楽しむ機会を設けるという趣旨のもと、以下のようにイベントを開催した。

開催日時は2017年8月27日(日)11時から15時、場所は、前年に調査を行った川崎市宮前区K地域のM公園である。自治会の有志の方にお手伝いいただき、流しそうめん、紙芝居、手作りワークショップ、昔あそび(紙ひこうき、糸でんわ)を行った。手作りワークショップでは、60cm×60cmの布をたくさんつないで、公園にシェードをつくる企画である。白い布には絵具やペンでお絵かきしたり手形をつけたりと、子どもたちが思い思いに自由に楽しく創作し、それをみんなでつなぎ合わせて、公園に大きな日かげをつくった。

地域の自治会の高齢者約40人にお手伝いをいただき実施した。子どもを中心に150名ほどの来場者があり、盛況に終わることができた。

(5) まとめ

公園の利用者は、立地、設備、面積などにより、使いやすい公園を選んで利用している。公園は開園してからかなりの時間が経過しているところが多く、長い年月のなかで、ピンポイント的に遊具等設備の取り換えはあるものの、大規模な改修はほとんど行われていない。それに対して、地域の居住者層や生活および考え方は変化している。つまり、経年変化による空間と利用形態がうまく対応していないといえる。それが利用の減少につながっている。

しかし、現実問題として、数多く存在する公園を全面的に改修することは困難である。すると、ソフト面の運用が重要になってくる。とくに「管理」が今後の重要な位置づけになってくるであろう。調査によってみられた、住民の手による管理によって得られる効果は大きい、それだけではさまざまな問題をすべて解決することはできない。官民および地域の住民が一体となることによって、単に公園の維持管理だけではない、プラスαの地域活動が創生されるのではないか。その仕組みづくりが急務である。今後も調査を継続し、データの蓄積を図りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(0件)

〔学会発表〕(計5件)

①番場美恵子、竹田喜美子、一地方の公園の利用形態および課題の考察(栃木県小山市0地区の場合)子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究その13、日本建築学会、2018年(予定)

②番場美恵子、竹田喜美子、管理体制の違い

からみた公園の利用形態と管理方法（川崎市宮前区 K 地域の場合）子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究その 11、日本建築学会、2017 年

③竹田喜美子、番場美恵子、犬の散歩からみる公園利用と交流の形態に関する考察（川崎市宮前区 K 地域の場合）子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究その 12、日本建築学会、2017 年

④番場美恵子、竹田喜美子、高齢者を中心とした公園の利用形態（所沢市 H 地域の場合）子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究その 9、日本建築学会、2016 年

⑤竹田喜美子、番場美恵子、街区公園でのイベント（夏祭り）開催におけるコミュニティ活動の仕組みに関する考察 1（川崎市 M 区 G 団地の場合）子どもと高齢者をつなぐ地域コミュニティの拠点としての公園のあり方に関する研究その 10、日本建築学会、2016 年

〔図書〕（0 件）

〔産業財産権〕（0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

番場美恵子（BAMBA, mieko）

昭和女子大学・生活科学部・専任講師

研究者番号：40384630

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

竹田喜美子（TAKEDA, kimiko）